

謡曲「藤」について

前田正民

甲南女子大学紀要の方に、世阿弥自筆本のもと、光悦本及び現行本の「江口」の曲を並列して、詞章の異同を検討し、さほど差異

のないことを記すことにしたが、ここには主として学生諸君を対象として、現行曲で流儀により著しく異なつた「藤」を取り上げて見ることとする。この曲は現在、宝生・観世・金剛の三流に存する。

尤も金剛流では最近取り上げるようになったようで、語句に僅かばかり違いがあるが、殆んど宝生流と変りがない。観世流では筋書は同じながら、詞章に於いて他の曲に見られぬ甚だしい違いがあり、非常に珍らしく思うので、宝生・観世のものを二段にして掲げる。

謡曲大綱に佐成氏が記されたように、宝生流の方が古いように思われるので、上段に宝生流、下段に観世流を記す。宝生流の方は行末で句読になる場合は句点を次行の行頭に記しているので、それに従つた。しかし印刷の都合で行末でも。を附した所があるが、宝生流謡本では行末に。をつけることは絶対ないことを断つておく。

光悦本も句読が行末になる時は次の行頭に書くことになっている。現行他流は皆行頭には記されていない。

謡い方の記号は大部分省略し、次第・道行・下歌・上歌・サシ・クセ・ロンキ・一セイなどは記し、その他、下・中・上など一部分記しておいた。仮名遣・送仮名などはすべて原文通りとし、勝手に直しなどしない。しかし原本に続いて書かれている処などは、便宜行を改めた処もある。

藤 宝生流

ワキ^{水原上} 山また山を遙々と。山また山をはるくくと。越路の旅に急がん
ワキ^{水原上} かやうに候者は。郡方より出でたる僧にて候。我此程は北園に下
り。声の篠原安宅の松。こゝかしこの名所を一見仕りて候。これよ
り善光寺へ参らばやと思ひ候。雪晴る、白山風も長閑にて。白山風
も長閑にて。おと高松の波までも。治まる道に戸ざしせぬ石動山を
すぎむらや。青葉に見ゆる紅葉川。そなたとばかりしら雲の。遙々
行けば暮れそむる。氷見の里にも着きにけり氷見の里にも着きにけ
り。急ぎ候程に。これははや越中の園くずみの郡氷見の里に着きて
候。又あれなる湖は。承り及びたる多粘の浦にてありげに候。立ち
寄り見ばやと思ひ候。まことに聞き及びたるよりは一人なる湖水の
景色にて候。又これなる松にまじへる藤の。今を盛りと見えて候。
常磐なる松の名たてにあやなくも。かゝれる藤の咲きて散るやと。
古ることの思ひ出でられて候

シテ^下 へなうなうあれなる旅人に申すべき事の候。へ此方の事にて候か
何事にて候ぞ。へこれは多粘の浦とて藤の名所なれば。古人の歌を
も思ひぞ出づる。多粘の浦や汀の藤の咲きしより。うつろふ浪ぞ。
色に出でぬる。かやうの歌をば詠じ給はで。松の名たてと口ずさみ
給ふは。あら心なの旅人やな。へ思ひよらずや人ありとも。知らで

藤 観世流

ワキ^{水原上} 山また山を遙々と。山また山を遙々と。越路の旅に出でうよ
ワキ^{水原上} へこれは郡方より出でたる僧にて候。我この程は加賀の園に候ひ
て。此処彼処の名所を一見仕りて候。又これより善光寺へ参らばや
と思ひ候。雪晴る、白山風も長閑にて。白山風も長閑にて。
日影長江の里も過ぎ。さゝぬ刀奈美の関越えて青葉に見ゆる紅葉川。
其方とばかり白雲の。氷見の江行けば名に聞きし。多粘の浦にも着
きにけり多粘の浦にも着きにけり
へこれははや越中の園多粘の浦とかやに着きて候。この所は藤の名
所と承り及びたるに。真にあれなる藤の今を盛りと見えて候。立ち
寄り見候べし。げに面白く咲きて候。おのが波に同じ末葉の萎れけ
り。藤咲く多粘の。恨めしの身ぞ。古言の思ひ出でられて候

シテ^下 へなうなうあれなる旅人に申すべき事の候。へ此方の事にて候か
何事にて候ぞ。へこれは多粘の浦とて藤の名所なり。古き歌に。多
粘の浦や汀の藤の咲きしより。波の花さへ。色に出でつゝ。かやう
の歌をも詠じ給はで。おのが波に同じ末葉の萎れけりなど口ずさみ
給ふは。あら心なの旅人やな。へ思ひ寄らずや人ありとも。知らで

吟じし古ることながら、^{シテ上}花を賤しく岩代の、^{ワキ上}松の名たてと詠せしは、^{シテ上}心もなしと思ひ草、^{ワキ上}引きてよむべき、^{シテ上}數嶋の、^地多結の浦をこさへ匂ふ藤波を。そこさへ匂ふ藤波を。かざして行かん。見ぬ人のためとよみ置きし此花を心なく。ながめ給ふは恨めしや。げにや思へば君ならで。誰にか見せん梅の花。色をも香をも知る人の知るとよみしも理りや知るとよみしも理りや

^地げに理りとしら糸の。くるれば露のふる言を語れる人は誰やらん、^{シテ上}我を誰とか思ひ寝の。夢か現か幻の。花人と思し召せ、^地身を花人と思へとは。借は疑ひ波になく、^{シテ上}かへさの鷹のいる雲の、^地松にかゝれる、^{シテ上}藤の花の、^地精なりといふ千鳥。立ち去り行くや多結の浦。汀に脚く松の本に寄ると見えて失せにけりや寄ると見えて失せにけり、^{中入}

^{ワキ上}霞む夜の月の光は鳥羽玉の。月の光は鳥羽玉の。よるべ定めぬうかれ鳥鳴く音も法の声添へて。花の跡とふ松風の。声物すぎき磯枕。仮寝の夢や覚ますらん仮寝の夢や覚ますらん、^{中下}然りか。空しき空に。散る花の。あだなるいろに。迷ひそめけん、^{ワキ上}ふしきやな夜も更け過ぎて月うつる。水さへ匂ふ藤の陰より

まみえ給ひし顔ばせは。花の精にてあるやらん、^{シテ上}中々藤の花なるが。妙なる仏果の御法の雨に。開くる花の菩薩となりて。これまで現れ出でたるなり、^{ワキ上}あらず有難やさりながら。二度言葉をかはず

吟ぜし古歌ながら、^{シテ}花の為には如何ならん、^{ワキ上}同じ末葉の萎れぬる、^{シテ}恨みならずや恨めしや。かの細麻呂の歌に、^上多結の浦。底さへ匂ふ藤波を。底さへ匂ふ藤波を。賤して行かん。見ぬ人の為と詠みたりし。この花を心なく。詠じ給ふは恨めしや。げにや思へば咲く花の。色をも香をも知る人ぞ知ると詠みしも。ことわりや知ると詠みしも理りや

^{中入}思議やさてもかくばかり。その白露の古言を語り給ふは誰やらん、^{シテ上}我を誰とか夕日影。紫匂ふ花鬘。心にかけて賜給へ、^地心にかけて思へとは。梢に懸る藤波の、^{シテ}多結の浦曲に、^地名にし負ふ。花の精なりと。夕雲の足速み。多結の浦風うち脚き。花の波立つもとに寄るかと思えて失せにけり。寄るかと思えて失せにけり、^{中入}（例外に「任守四阿アリ」と記されてゐる。）

^{ワキ上}霞む夜の。月は出でて、も鳥羽玉の。月は出でて、も鳥羽玉の。よるべ定めぬ浮かれ鳥。鳴く音も法の声添へて。花の跡訪ふ春の風。声もの凄き波枕。仮寝の夢や覚ますらん仮寝の夢や覚ますらん、^中如何なれば虚しき空に。散る花の。徒なる色に。迷ひ初めけん、^{ワキ上}思議やな夜も更け過ぐる月影に。現れ出づる姿を見れば。ありつる女人の顔ばせなり。いかさま疑ふ所もなく。花の精にてましますか、^{シテ}恥かしながら花の精。妙なる御法の一味の雨に。開くる花の笑の肩。これまで現れ出でたるなり、^{ワキ上}あらず有難やさりながら

事。何の爲にてあるやらん シテ上 意生化身をうけ衣の。かさねてきたり夜もすがら。歌舞をなさんと参りたり ワキ上 げにやもとより狂言綺語も キコシテ上 謙仏乗の因縁は ワキ上 隔てはあらし シテ上 法の身の シテ上 うるはは木により藤の如くなり。木により藤の如くなり。教への外なる法までも。悟りをえの藤の開くる。心の花なれや。蚤の刈る藨の草も木も。成仏こゝにありそ海深きや法の道ならん深きや法の道ならん シテ上 げにや春を送るに舟車を動かす事を用ゐず。唯残鶯と落花とに。わかれたり

シテ上 紫藤露の底に残る花の色 シテ上 翠竹苑のうちに暮れ。鳥の声げに面白や水の面に。かすめる月の春もはや。くれなる匂ふ花かづらかゝる致景はまた世にも シテ下 奈古の浦回も程近き シテ下 眺めに つゞく。景色かな

クセ下 沖つ風。吹きこす磯の松が枝に。餘りてかゝる多枯の浦。藤波のよるひるわかで徒に。送り迎へて年月の。春の花ちりふる雪深緑夏は橘に。袖ふれし匂ひまで。聞けば昔を忍ぶ草。一葉散りては秋なりと。夕べの月を湖の。浦吹く風にさよ更けて。あかつきと白波立ちて鳴く千鳥。友呼ぶ声も霜雪に。冬の景色は知らるらん シテ上 かやうに移れば世の中の シテ上 理りながらことに藤は。咲きて程なく散る花を借しむ人しも波の上。唯朝霞たなびく色のみ春のかたみぞと。知られしられて有明の。月にひるがへす舞の袖紫匂ふ袂かな シテ下 咲く

から。かくしも言葉を交はす事。何の故にてあるやらん シテ上 意生化身自在不滅の。縁に引かれて夜もすがら。歌舞をなさんと参りたり ワキ上 げにや元より狂言綺語も シテ上 謙仏乗の因縁 ワキ上 隔てはあらし シテ上 紫の上 シテ上 由縁の色も緑ならめ。由縁の色も緑ならめと。教への外なる法までも。今こそ悟りの開くる。心の花なれや。されば非情の草も木も。成仏こゝに荒磯海深きは法の道ぞかし深きは法の道ぞかし シテ上 げにや春を送るに。舟車を動かす事を用ゐず。たゞ残鶯と落花とに。別る

シテ上 紫藤露の露の底に残る花の色 シテ上 げに面白や水の面に。月の微める春もはや。紫匂ふ花曇かゝる致景は又世にも シテ中 奈古の浦曲も。程近く シテ中 眺めに 続く。景色かな

クセ下 懐かしき シテ中 色の由縁と思ふにも。心にかゝる藤波の。夜昼わかで徒らに シテ中 送り迎ふる年月の。春の花散りて青葉に。夏たらばなの匂ふにぞ。見ぬ世の人も偲ばるれ。 シテ中 桐の葉落ちて秋来ぬと。 シテ下 若くも月の影澄むや。浦吹く風に小夜更けて。あかつきと白波。立ち騒ぐ群千鳥。友呼ぶ声や霜雪に。冬の気色の知らるらん シテ上 かやうに移るふ四つの時 シテ上 理なれや夏かけて。盛り久しき藤波の。花に立ち添ふ朝霞。暮れ行く春の形見ぞと。借しむ心も紫の。深く頼みを松が枝に。かゝる契りぞ頼もしき シテ中 面白や シテ下 面白白や。

藤の (ノノ野) ^{シテナカ} 咲く藤の。花のかづらや。佐保姫の ^{地上} ノ ^{シテ} 袖の緑の松にかゝれる松にかゝれる松にかゝれる ^{シテ下} へ ^{シテ下} かくれる松にうす花の ^{地上} へ ^{シテ下} かくれる松にうす花の。色紫の。雲の羽袖をかへす舞姫。歌へや唄へ折る柳落つる梅あるひは花の。鶯の囀りの。声の匂ひも深みどり。英速の ^{シテ中} 濱風多枯の浦なみ。打ちちらし吹き払ひ花も飛び行く胡蝶の夢の。春のみじか夜明くる横雲に光彩さす朝日山の。光彩さす朝日山の梢に青葉や。残るらん

以下この曲について項目に分けて考察する。

一、梗概 都方から出て来た僧が善光寺へ参ろうとして北国路を廻り、越中の国多枯の浦へ来ると、藤花が盛りの色を見せているので常磐なる松の名たてにあやなくもかかれる藤の咲きて散る哉という古歌を吟じていると、一人の女性が現れて、こは藤の名所故、多枯の浦や汀の藤の咲きしよりうつろふ浪ぞ色に出でぬるといふこと詠まれた歌があるのを吟じないで、なぜさような歌を詠むるかとなじり、更に種々の古歌などを引き、自分は藤花の精であると告げて姿をかくす。僧はそこで仮寝の夢を結ぼうとしていると、藤花の精が再び現れ、歌舞をするために来たと言ひ、藤花を讚美しながら歌舞をするうちに夜が明けて行く。

二、作者 二百十番謡目録には安清作とある。能勢氏の能楽源流考

寛に吹くなる。春かぜに ^{地上} ノ ^{シテ中} 誘はれつゝも。千代を唱ふる。千代を唱ふる。千代を唱ふる。 ^{地上} へ ^{シテ中} 松に懸りて。咲く藤の ^{地上} へ ^{シテ中} 海紫の雲の羽袖を返す舞姫 ^{シテ中} へ ^{シテ中} 隔てぬ色も匂ひも。折る柳落つる梅 ^{地上} へ ^{シテ中} 或は花の ^{シテ中} 藤生野も ^{地上} へ ^{シテ中} 隔てぬ色も匂ひも。深海松の。英速の濱風。多枯の浦曲に吹き寄すも音さゆる。波も文どる舞の袂。月に鬨す。影も映るや。紫の。影も映るや紫の。曙に薫りて。 ^{シテ中} 霞く霞に。入りにけり

の謡曲作者考中「藤」の項に「二百十番謡目録に佐阿弥作とあるが自家伝抄にはこの曲は見えない。伝説では、ずつと後世に出来た曲であるとも伝へてゐる。やや疑問とすべきものであるが、仮りに佐阿弥の部に加へて置く。」とある。二百十番謡目録は明和二年(徳川十代家治の時) 観世左近元章の著で、内容についてはとかく問題にされている書であるが、一往参考にはされておる。この二百十番謡目録には、安清作として、六浦・殺生石・六月故・藤・吉野天人・高野物狂・橋弁慶の七番が載つて居り、この書の「作者之人數」の項に「日吉四郎次郎安清後佐阿弥 長禄二戊寅八月四日死、七十六歳」とある。安清については、手近の書に所見がないが、長禄二年死去が事実ならば足利八代義政の時である。因みに能本作者註文には藤は掲げてなく、残り六曲何れも安清作とせず、世阿弥・禪竹・

小次郎又は作者不分明能となっている。

三、典拠 本曲は筋の上では典拠はなく、多祐の浦の藤を詠んだ古歌を本にして作りあげたもので、世阿弥が能作書で述べている「作能とて、さらに本説もなき事を新作にして、名所・旧跡の縁に作りなして一座見風の曲感をなす事あり。これは極めたる達人の才字の能なり。」に当たるものである。即ち高砂・胡蝶・西行核・六浦などの類で、動植物の精魂を主体とし、関係のある和歌を配して作ったもの。傑作とは言えぬかも知れぬが、三番目物の一代表的名ものと思ふ。

四、所 多祐の浦 現在の氷見市の南方で、上田子・下田子に分れている処と言う。田子の字を書き、タゴと言っている。この地は万葉集中に二、三出て居り、多古・多胡・多祐の字が使われているが、タゴと清音でよまれておる。諸種の注釈書その他に祐を祐としているのも多い。

五、引歌・引詞等 謡曲には古い和歌や詩句などを用いることは多いのであるが、藤には特に多いことが目立つ。

(一) 和歌

1 雪晴るる白山風も長閑にて (宝生・金剛)

雪消ゆるる白山風も長閑にて (観世)

これは古今集露歌に「こしの園へまかりける時しら山を見てよめる みつね きえはつる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞありける」をふんで用いたと思われるが、観世は、雪消ゆるとなっていて、謡曲大観には、躬恒の歌を逆にして「雪消ゆる」といつたと注してある。いかにも、消えはつる時しなればから、雪消ゆると逆にしたようであるが、何やらわざとらしさが強く、白山の雪としては、雪晴るるの方がよいと思ふ。

2 常磐なる松の名たてにあやなくもかゝれる藤の咲きて散るやと (宝生)

常磐なる松の名たてにあやなくもかゝれる藤の咲て散かな (金剛)

これは続古今集春歌下「題しらず 貫之」ときはなる松の名たてにあやなくもかゝれる藤の咲きて散るかな」(和漢朗詠集にも載る。)を用いたもの。宝生は末句を、「散るやと古ることの思ひ出でられて候」と転じているが、金剛は原歌通りにし、「古事の思ひ出られて候」となっている。宝生の「と」はここでは無用だと思ふが、謡曲の文にはよくあるやり方で、後の方には、宝生・金剛にこの逆の場合がある。ただ「哉」の字はやともかなとも読むので、本来「哉」の字が書かれていたのを「や」と讀うようになったのではないかとの臆測も出来る。現に国歌大観や金子氏の和漢朗詠集新釈

にはこの歌に「哉」の字を記している。観世ではこの歌を用いず、次のようになってゐる。

3 おのが波に同じ末葉の萎れけり藤咲く多枯の恨めし的身ぞ

これは、新古今集雑歌上「五十首の歌奉りし時 前大僧正整円おのが波におなじ末葉ぞ萎れぬる藤咲く田子のうらめし的身や」によつたもの。拾玉集にも同じ歌が出てゐる。この歌の、末葉ぞを末葉のとし、身やを身ぞにしている。

4 多枯の浦や汀の藤の咲きしよりうつろふ浪ぞ色に出でぬる（宝生・金剛）

但し金剛は多胡の字を用い、咲し・出ぬると書いてある。なおこは先の、常弊なるの歌の場合と反対に、宝生はこの歌で句切り、かやうの歌をばとしてゐるが、金剛は右の歌の後に「と」を附けてか様の歌をばと統けてゐる。

これは、続後拾遺集春歌下「百首歌奉りし時 前関白左大臣 多枯の浦や汀の藤の咲きしより移ろふ浪ぞ色に出でける」により、出でけるを出でぬるとした。ついでながら、国歌大観・国歌大系共にここは多枯の字が書いてある。

この歌の所、観世は次の如くなつてゐる。

多枯の浦や汀の藤の咲きしより波の花さへ色に出でつゝ

これは草庵集春歌下「基任が家にて歌合し侍りしに、水辺藤た

このうらや汀の藤の咲きしより波の花さへ色にいでつゝ」とあるのをそのまま用いてゐる。これも観世の方が草庵集にあるのを知つていて書いたらしい。続拾遺集は草庵集より以前のようなだから、この歌から見ても「藤」は宝生の方が観世より以前のもつと認められる。

謡曲大観は頭注に、続後拾遺集藤原房実の歌。下句「うつろふ波ぞ色に出でける」宝生では原歌の通りに謡ふ。とあるが、原歌の通りではなく、草庵集の歌にも気づいてゐない。因みに国歌大系は索引のところに「たごのうらやなぎさのふちの」としてゐるが本文の方には汀の字が書いてあり、みぎはと読むべきである。

5 多枯の浦そこさへ匂ふ藤波をかざして行かん見ぬ人のため（宝生）

多枯の浦底さへ匂ふ藤波を翳して行かん見ぬ人の為（観世）
多胡の浦そこさへ匂ふ藤なみを翳て行かん見ぬ人の為（金剛）
各流文字違ひに違ひはあるが同文である。

これは万葉集十九卷に「十二日、遊三覽布勢水海一、船泊於多枯灣」望見藤花各述懐作歌四首」として二番目の歌に「多澳乃浦 底左倍爾保布 藤奈美乎 加射之氏将去 不見人之為（多枯の浦の底さへにはふ藤波をかざして行かむ見ぬ人の為）次官内蔵忌寸 繩麻呂」とある。初句の「の」を省き、行かむを行かんとしたも

の。観世では「かの細麻呂の歌に」をこの歌の前に附加している。

ところでこの歌は、和漢朗詠集に採られて居り、春藤の所に、「たこの浦そこさへにはふ藤なみをかさしてゆかむ見ぬ人のため見」とあり、初句を「たこの浦」として居る。謡曲全部を通じて、詩句は勿論、引用の和歌も和漢朗詠集に載っているものが随分多い。現に「藤」の中にも、「君ならで誰にか見せむ・ときはなる松の名たてに・さつきまつ花橘」の歌など何れも和漢朗詠集に載っている。すべての場合を和漢朗詠集とは言えぬかも知れないが、このたこの浦の歌などは原歌は万葉集であっても、直接には和漢朗詠集によつたものと見てよいかと思う。

6 げにや思へば君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人

の知るとよみしも (宝生)

実や思へば君ならで誰にか見せん梅の花いろをも香をも知る人

ぞしると詠みしも (金剛)

げにや思へば咲く花の色をも香をも知る人ぞ知ると詠みしも

(観世)

古今集春歌上「梅の花を折りて人におくりける ともりの 君ならでたれにか見せむ梅の花いろをも香をも知る人ぞ知る」これは周知の歌で、古今和歌六帖・友則集・信明集などにも載り、和漢朗詠集にも採られている。

宝生・金剛は右の歌を用いている。むをんとすることは後世の筆法であるが、宝生の方は「知る人ぞ」を「知る人の」として居る。

観世は、初句二句を省いて、第三句「梅の花」を「咲く花の」と変えている。近世の歌人、鶯殿餘野子の歌集佐保川(国歌大系所収)に「咲く花の色をも香もかりの世の思ひすててや君はいにけむ」というのがある。この歌によつて細工したという感がする。

7 花の跡とよ松風の (宝生)

花の跡訪ふ松風の (金剛)

花の跡訪ふ春の風 (観世)

宝生・金剛は同文句であるが、観世の方は春の風となっている。

花の跡とよという句は国歌大系をみると、他にも数首見えるが、ここにふさわしいものがなく、新古今集春歌下寂蓮法師の歌に「散りにけりあはれうらみの誰なれば花の跡とよ春の山風」とあるのが縁が近く、これによつて書かれたいると見てよいかと思う。この点観世の方が春の風と一層縁深くなっている。

8 偽りか空しき空に散る花のあだなるいろに迷ひそめけん (宝生)

生)

いつはりかむなしく空に散る花のあだなる色に迷ひそめけん

(金剛)

如何なれば虚しき空に散る花の徒なるに迷ひ初めけん (観世)

金剛は、むなしく空に、宝生は、空しき空にと殆んど同じだが、
觀世は、初句が如何なればとなつてゐる。

これは、草庵集歌「いつよりかむなしき空にちる花のあたなる
色にまよひ初めけむ」とあるのによつてゐる。

9 紫の由縁の色も緑ならめ(觀世)

統千載集秋歌上に「百首歌奉りし時 前関白左大臣神路 紫のゆ
かりの色をたづねてや萩さく野辺に鹿のなくらむ」というのがあ
る。「紫のゆかりの色」だけでは、この歌によつたとは言われない
だろうが、この歌中の詞を仮りにてゐるとは言い得ると思ふ。

宝生では、全文を掲げた処にある通り「讃仏乗の因縁は隔てはあ
らじ法の身のうるほひは木により藤の如くなり木により藤の如くな
りと教への外なる法までも」となつており、金剛は「讃仏乗の因縁
なれば隔てはあらじ法の身のうるほひは木による藤の如くなり木に
よる藤の如くなり」と教への外なる法迄も」と、宝生と殆んど同じく
觀世は「讃仏乗の因縁隔てはあらじ紫の由縁の色も緑ならめ由縁の
色も緑ならめと教への外なる法までも」と変えている。宝生の文句
に關係の歌は見当たらない。

10 沖つ風吹きこす磯の松が枝に餘りてかゝる多枯の浦藤波のよる

ひるわかで徒に(宝生)

沖津風ふきこす磯の松が枝に餘りてかゝる多胡の浦藤波のよる

るひるわかで徒らに(金剛)

これは玉葉集雜歌「藤原宗泰 沖つ風吹きこす磯の松が枝にあ
まりて懸る田子のうら藤」をそのまま用い、多枯の浦で切り、藤波
のと続けた。

11 懐かしき色の由縁と思ふにも心にかゝる藤波の夜昼わかで徒ら

に(觀世)

觀世は前項の歌を変えてこのようにしている。これは、金葉集春
歌「藤花をよめる 藤原頭輪朝臣 むらさきの色のゆかりに藤のは
なかゝれる松もむつまじきかな」(この歌左京大夫頭輪朝集にも載
つてゐる。)によつてゐる。謡曲大觀頭注は「むつまじきかな」を
「むつかしきかな」と誤植している。ついでながら、むつまじは後
世の軀で、この時代ではむつまじと清音に言つたのではないかと思
うが、今は国歌大観・国歌大系のままにして置く。

12 夏は橘に袖ふれし匂ひまで聞けば昔を忍ぶ草(宝生)

夏は橘に袖ふるゝ匂ひまできけば昔をしのぶ草(金剛)

夏たちはなの匂ふにぞ見ぬ世の人も偲ばるれ(觀世)

宝生と金剛は殆んど同じく、觀世は大分變つてゐるが、これは、
古今集夏歌「詭人しらず さつき待つ花たちはなの香をかげば昔の
ひとの袖の香ぞする」(伊勢物語にも出て居り、和漢朗詠集にも採
られている。)によつてゐる。

13 あかつきと白波立ちて鳴く千鳥友呼ぶ声も霜雪に冬の景色は知らるらん(宝生)

曉と鳴く千鳥友呼声も霜雪に冬の気色やしらるらん(金剛)
あかつきと白波立ち騒ぐ群千鳥友呼ぶ声や霜雪に冬の気色の知らるらん(観世)

ここは各流共文句に違いがあるが、新葉集冬歌「正平十六年内裏にて人々廻を探りて百首歌よみ侍りけるとき曉千鳥を 藤原伊実

冴え渡る霜夜の月の有明に友呼ぶ千鳥声聞ゆなり」によつたと思われ。

14 唯朝霞たなびく色のみ春のかたみぞと(宝生)

唯朝霞棚引色のみ春のかたみぞと(金剛)

これは、新勅撰集夏歌「題しらず 相模 霞だに山路にしばし立ちどまれ過ぎにし春のかたみとも見む」によつたと思われる。

15 この辺観世の詞章は大分異っている。宝生は「理りながらことに藤は咲きて程なく散る花を惜しむ人しも波の上唯朝霞たなびく色のみ春のかたみぞと」(金剛も文詞は同じ)であるが観世は、

理なれや夏かけて盛り久しき藤波の花に立ち添ふ朝霞暮れ行く春の形見ぞと

となつていて、前半に今一つ次の歌をふまえている。

16 続後撰集春歌下「題しらず 後京極摂政太政大臣 春をへてさ

かりひさしき藤のはな大宮人のかざしなりけり」(藤原良経の月清集にも載っている。)

17 紫匂ふ袂かな咲く藤の花のかづらや佐保姫の袖の緑の松にかゝれる松にかゝれる松にかゝれる松にかゝれる松にうす花のかゝれる松にうす花の色紫の雲の羽袖を(宝生) (金剛も文詞は同じ)

は同じ)

この辺は、続千載集春歌下「天徳四年内裏歌合に、藤 中納言朝忠 紫に匂ふ藤なみうちはへて松にぞ千世の色もかゝれる」によつて作られたと思われる。宝生の、「咲く藤の」から後は、観世では「面白や面白や寛に吹くなる春かぜに誘はれつゝも千代を唱ふる千代を唱ふる松に懸りて咲く藤の薄紫の雲の羽袖をとなつて、宝生に比べて大分縁遠くなっている。

〔詩文〕

1 げにやもとより狂言綺語も讃仏乗の因縁は隔てはあらじ(宝生)

実やもとより狂言綺語も讃仏乗の因縁なれば隔てはあらじ(金剛)

〔剛〕

げにや元より狂言綺語も讃仏乗の因縁隔てはあらじ(観世)

和漢朗詠集仏事の次の句によつては、
ハハチコソツキヤセノ
願以三今生世俗文字之業、狂言綺語之誤。翻為三当
来世世讚仏乗、因、轉法輪、之縁。白香山詩

元来白楽天の白氏文集の文中の句であるが、和漢朗詠集から引用される事が多い。

2 げにや春を送るに舟車を動かす事を用ひず唯残鶯と落花とにわかたれたり(宝生)

実や春を送るに舟車を動かす事を用ひずたゞ残鶯と落花とに別れたり(金剛)

げにや春を送るに舟車を動かす事を用ひずたゞ残鶯と落花とに別る(観世)

観世は末句「別る」となっている。

和漢朗詠集 春

送^{ルニハ}春^ヲ不^レ用^レレ^キ動^ス舟^ヲ車^ヲ唯^ニ別^ル鶯^ト落^ト花^ト一。送^レ春^ト。

3 紫藤露の底に残る花の色翠竹苑のうちに暮れ鳥の声げに面白や水の面に(宝生)

水の面に(宝生)

紫藤露の底に残る花の色翠竹苑の中に暮^ルる鳥^ノ声^実面白^や水の面に(金剛)

紫藤露の露の底に残る花の色げに面白や水の面に(観世)

各流少しづつ違いがある。

和漢朗詠集 春

紫藤露^ノ底^ニ残^ル花^ノ色^翠竹^ノ苑^ノ中^ニ暮^ル鳥^ノ声^一。四月有二餘年一
時。源相現

4 一葉散りては秋なりと夕べの月を湖の(宝生)

一葉ちりては秋なりと夕べの月をみつうみの(金剛) ミツウミと清音になっている。宝生は濁る。

桐の葉落ちて秋来ぬと若くも月の影澄むや(観世)

故事熟語大辞典(池田盛洲)に、

「一葉落知^{イダ}三天下秋」〔意義〕些細なることを以て、大事を察するをいふ。書言故事に、一葉知秋の注に、一葉者、梧桐也。〔出

処〕文録に、唐人の詩を説せて曰く、山僧不^レ解^二数^一甲子^一、一葉知^二三天下秋^一。又た李子卿の秋虫賦に、一葉落兮天地秋。〔原始〕

淮南子説山訓に、以^レ小明^レ大^レ、見^二一葉落^一、而知^二三歳之将^レ落^一、視^二三瓶中之冰^一、而知^二三天下之寒^一。(下略)

右の注に見えるように、この一葉は梧桐を指すので、観世は、桐の葉落ちてとしたのである。

5 折る柳落つる梅(宝生・金剛・観世)

和漢朗詠集 管絃

落^ル梅^ノ曲^旧唇^吹雪^折柳^ノ声^新手^掬煙^一。花開^ル見^ル言^ハ一^一。

白 仏語に關するもの

1 妙なる仏果の御法の雨に開くる花の菩薩となりて(宝生)

御吊ひの法の雨に開くる花の菩薩と成て(金剛)

妙なる御法の一味の雨に開くる花の笑の眉(観世)

妙なる法、又妙なる法の花は、妙法蓮華經をさし、謡曲によく使

っている。観世の「一味の雨」は、妙法蓮華經の藥草論品に「仏、平等説、如三一^ハ味^ノ雨^ノ、随^{ヒテ}衆^ノ生^ノ性^ニ、所^レ受^{ケル}不^レ同^シ、如^シ彼^ノ草木^ノ、所^レ稟^{ケル}各^ノ異^{ナリ}。」とある。

ついでに、後鳥羽院御集 詠百首和歌に 法華 いたづらに瀕る
草木もなかりけり一味の雨の雨の所分かねば とうのがあり、右と
関係があるので、ここに記しておく。

2 意生化身をうけ衣の（宝生）

異性化身をうけ衣の（金剛）

意生化身自在不滅の（観世）

仏教大辞典（織田得能）意生身の所に、勝鬘經その他二三の経典を掲げて在処を示してあるが、意生化身の項には、「術語」菩薩の意のまゝに生ずる變化身を云。として仏典は記してない。その後には、

（曲、藤）に「意生化身自在不滅」（観世作）と記してある。

3 教への外なる法までも悟りをえの藤の開くる心の花なれや

教への外なる法迄も悟りを江の藤の開くる心の花なれや（金剛）

教への外なる法までも今こそ悟りの開くる心の花なれや（観世）

仏教大辞典に、教外別伝（術語）禪宗向上の作略、文字を施設

せず、言句を安立せず、直に仏祖の心印を伝ふるを云。即是教内の真伝なり。達磨の「悟性論」に「直指^ニ人心^ニ。見^テ性^ヲ成^ス仏^ト。教外^ニ別^ニ伝^フ。不^レ立^ニ文字^ト。」と記し、更に一二教典を示してある。

4 蟻の刈る蕪の草も木も成仏こゝにありそ海（宝生）

蟻の刈る蕪の草も木も成仏こゝに荒磯海（金剛）

されば非情の草も木も成仏こゝに荒磯海（観世）

仏教大辞典に、一仏成道。観見法界。草木国土。悉皆成仏。（雑語）一頌四句の偈文、大乘の極意を説く。一仏成道して慈眼を以て法界を觀見すれば一切の有情無情皆成仏すとなり。但し古來此偈を以て中陰經の文となすは非なり。と記してある。謡曲にはしばしば用いられている。

四その他

○開くる花の笑の眉（観世だけ）

源氏物語 夕顔の巻の初めの方に「いと青やかなる處の、心地よげに蔓ひかゝれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑の眉開けたる。（中略）かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。」のから採ってある。謡曲「半番」に、「おのれ獨り笑の眉を開けたるは」とあるのは、夕顔のこの所をそのまま言って居るので問題は無いが、「藤」では能の場合、藤花の精として一人の女性が出て来るのだけれども、びたりとしない。

以上引用された和歌や詩句などを主として宝生・観世の違いを見て来た。初めに記した如く、宝生と金剛とは殆んど同文であるが、仮名遣や漢字の違いもあるので、参考のため引用の所だけ並べておいた。引用以外の所の違いは全文を掲げた処で明らか故、省略する。

謡曲の詞章が流儀により、文句に違いがあり、引用の原詩歌の一部を変えて用いることは常套的手法であるが、藤の如きは全く珍らしい。よくも全文に亘ってこうも変えたものと思う。しかしその変え方があまりにわざとらしい。自分としては宝生流の方が優れていると思うが、自分の偏見だろうか。それにしても観世のように変えた筆者も相当な才学の特主であることに感心させられるのである。最後に引用の主な書物を左に掲げておく。

昭和三十六年五月発行 わんや書店 宝生流謡本

昭和三十年五月発行 松書店 金剛流謡本

昭和四十年六月発行 松書店 観世流謡本

国歌大系

国歌大観

金子元臣古今和歌集評釈

塩井正男・大町芳菴新古今和歌集評釈

佐成謙太郎謡曲大観

鴻巣盛廣萬葉集全釈

江見清風・金子元臣和漢朗詠集新釈